

小学校における英語活動の 研究授業報告

— 東京都世田谷区立池之上小学校における実践例 —

東京家政大学 酒井 藤恵



東京都世田谷区立池之上小学校（以下、池之上小）において開催された英語活動の研究授業、及び、授業後の協議会に参加する機会を得た。

授業者は、6年2組学級担任、着任5年目の若さあふれる樋口泰史先生である。

池之上小では、数年前よりALTによる授業を年間40時間程度実施している。また昨年度からは月1回、音楽朝会で英語の歌を歌うなどの機会を通して英語に親しんできた。本格的な英語活動は今年度より始動しており、研究授業と協議会は今回が初めてのことである。

英語活動の年間指導計画は、おおむね『英語ノート』に基づいて作成されている。

今回の研究授業は『英語ノート2』の“When is your birthday?”の復習の時限にあたり、月・曜日・序数を復習した後、カレンダーを用いた日付当てクイズと、トランプを用いた月名当てゲームが実践された。

授業開始直前の教室、樋口先生と児童がにぎやかにカメラに向かってポーズを決めていた。教室入室前は多少緊張した面持ちの樋口先生であったが、児童と一緒にピースをするうちに笑顔がこぼれ始めた。楽しい授業展開が期待される。

授業開始後、挨拶、ウォームアップは、ほぼall Englishで進められた。提示と発問のテンポも早く、4月から英語活動を開始した

ばかりとは思えない程、児童は英語に慣れ親しんでいる様子であった。月名の復習としてTwelve Monthsの歌を歌い、序数と曜日の復習としてカレンダー・クイズを行った。黒板に大きなカレンダーを提示し、先生がまず、ある日付を指す。次にその日付から“One day down”や、“Two days right”などと言いながら指した位置を動かし、移動先の日付や曜日を答えさせるクイズである。最初こそ先生も言葉を発しながら指を動かすが、その後は口頭による指示だけで児童は競って答えていた。

授業後の協議会で、位置を動かす際の表現方法が問題となった。例えば最初の日付を15日とすると、two days leftは13日が答えなのだが、13日は15日のtwo days beforeであるからtwo days leftという表現に違和感を覚える。しかし、児童はそのようなことを気にするはずはなく、クイズとしてはうまく成立していた。英語活動で常に正確な表現をinputすることを目標とするならば、教師の指示文の正確さ、適切さを入念にチェックする必要が出てくる。多忙な小学校の先生にその辺りのところをどこまで要求するかが問題になってくるであろう。

トランプを用いた“Thirteenth Month”というゲームでは、児童はチームに分かれ丸くなって座り、トランプを下向きに山に積んでおく。順番を決め、“Ready Go!”の合図で

カードをめくり、出た数字の月名を言う（7だったらJuly）。早く正確に言えた者が2枚のカードをもらうことができ、チームのカード獲得数で勝敗が決まる。ただし、トランプは13（King）までであるので、Kingを引いた児童は自分の誕生日を言うのがルールの一つである。筆者は各グループを参観したが、どのグループも最初の順番を決める時、“Rock, Paper, Scissors. 1, 2, 3!”を用いていた。またゲームの途中でも、“Good job!”、“Yeah, yeah.”などと英語を発する者も多く見られた。児童は20分以上、飽きることなくこのゲームを続けて行った。August, October, Novemberなどを初めは早く言えなかった児童もゲームの終わり頃には言えるようになっていた。ただしKingを引いた時に、自分の誕生日を正確に言えていたかどうかは把握されていない。このような時に、ALTや英語補助員とのチーム・ティーチングであれば、よりきめの細かい個別的な指導が可能になるであろう。

授業はこのゲームで大いに盛り上がった後、終了となった。

協議会で、樋口先生より「英語活動では児童の『心の開放』をキーワードに指導を行っている」という発言があった。言語は本来私たちの生活の一部として存在するものであり、とりわけ、初めて出会う外国語学習の初期段階においては、当該言語の知識の獲得に先立って、その言葉自体に慣れ親しむことが必要とされる。樋口先生の授業では知識の断片としてではなく、自然に英語を用いることができるような種々のゲームや活動がふんだんに用意されており、英語に慣れ親しむことのできる環境、つまり、誤りを恐れず、クラス全員が仲良く発言できる環境が整えられているといえよう。

小学校英語活動の問題点として、高学年で

すでに英語嫌いになってしまう児童が出てくる点が指摘されているが、今回参観した6年生は全員が生き生きと活動に参加していた。このように質の高い授業実践を可能にしたのは、少なくとも次の2つの条件が満たされているからであろう。1つには樋口先生の通常の健全な学級経営により、児童が前向きであることと、指導案が綿密に立てられていたこと。もう1つは協議会に参加して感じたことであるが、松本義久校長先生のもと、教職員の方々が熱心に討議に参加され、これまで真摯に英語活動の指導に取り組まれていることである。今後もこのような研究協議会を重ねられ、一層充実した英語活動の実践がなされることを大いに期待する。

